

古川 薫

獅子の廊下



古川 薫 獅子の廊下



文藝春秋

古川 薫（ふるかわ・かおる）

1925(大正14)年下関に生まれる。山口大学卒。
山口新聞編集局長を経て、文筆生活に入る。
65年「走狗」、74年「女体蔵志」、75年「塞翁
の虹」、78年「十三人の修羅」で直木賞候補
となる。著書に「高杉晋作」「吉田松陰」「長
州歴史散歩」「海と西洋館」「討賊始末」「炎
と青雲——桂小五郎篇」「炎と青雲——木戸
孝允篇」など多数。

獅子の廊下

昭和五十三年十一月三十日 第一刷

定価 九八〇円

著者 古川 薫

発行者 桧原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話(〇三)二六五・一二二一

印刷 共同印刷

製本所 和田製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

獅子の廊下／目次

序章	奈落の墓標	5
第一章	風の旅情	9
第二章	俗論党縁起	34
第三章	地震と軍艦	47
第四章	闇のかなた	85
第五章	雪降る小周防	100
第六章	遠い砲声	116
第七章	三つの首	133
第八章	獅子の廊下	174
第九章	畏への遁走	205
終章	斧鉞をわれに	232

装帧
三井永一

獅子の廊下

序章 奈落の墓標

毛利氏の旧城下、萩市江向に徳隣寺という臨済宗の寺院がある。その墓地に、歿年や俗名を匿し、「遁翁自樂居士」の戒名だけを浅く彫って、他の墓石群に背を向けた、小さな自然石の墓標が一つ、謎のように置き忘れられている。背を向けているというのは、片隅にあるこの墓のみが、正面を逆の方向に据えられ、いかにも世を憚るふうに見えるからである。

これが長州藩士棕梨藤太の墓であるとわかったのは、彼の死からおよそ八十年後の昭和十九年秋、すでに敗色濃い太平洋戦争のさ中だった。寺の過去帳によって、偶然たしかめられたのである。

藤太の遺骸はここに埋められていたのかと、ある感慨をもってそれを眺めたのは、地方史に詳しいごく一部の人々にすぎず、その後も多くは語られていない。何となく藤太に関

するおぞましい記憶を振り払いたいというような気配が、地元民のあいだに漂うのである。幕末の一時期、猛々しい権勢を藩内に振るった「俗論党の巨魁」と考えられているからであろう。急進派に対する血の粛清を敢行した彼は、やがてみずからも首を打たれて獄に果てる。極悪人の烙印を押され、徳隣寺の一隅に埋められて、藤太の名は、藩史から抹消された。

棕梨一派がおこなったいわゆる「元治甲子の曲行」についての史料は、相当に詳しく遺っている。それは功、労、者、た、ちの殉難の模様を伝えるためであるが、同時に棕梨藤太に対する憎悪がその残忍な行為を数えたてているのだ。ところが、藤太自身に関するものといったら、筆跡のひとつかけらも遺ってはいない。遺族が持ち出したほか、目にふれるものは焼き捨てられたのだろう。じっさい藤太が住んでいた家の位置さえも定かでないというのは、何か不思議なことに思われる。

棕梨藤太を、長州維新史から消し去ろうとする何者かの意志が働いたとしかいいようがない。しかし彼ほどの者の事跡を、ことごとく黙殺するなどは到底できないので、つまり藤太の残像を浮かびあがらせる傍証資料は、随所に取り残されていたのである。それらを継ぎ足していけば、幕末開国期を起点として、この人物に与えられた役割と波乱にとんだ軌跡を追い、埋め込まれていたもう一つの歴史を語るには、ほぼ充分であろう。

棕梨藤太は、文化二年（一八〇五）、萩藩の遠近附士^{えんきんづきし}棕梨次郎左衛門の長子として生まれた。ちなみに萩藩というのが、長州の宗藩である。長府や岩国などの支藩をふくめた総称として長州藩と呼ぶが、おおむね萩藩をさしていることが多い。

嘉永五年につくられた萩藩の分限帳によると「遠近／棕梨藤太／敬蔵」とあり、禄高は「四拾貳石五斗五升七合」で、「外七石減少石」となっている。減少石というのは、その分だけ禄を藩に返上して、代りに銀を借用していることを示すものだ。貧しさがしのばれる。

遠近附士とは、旗本の大組士^{おおくみし}より一段さがった階級で、馬廻並^{うままわりなみ}の士ともいった。四十石から五十石未満の下級武士である。

藤太がそのような微禄の身で、重臣をしのぐほどの権力をにぎったのは、ひとくちにいつて、幕末人材登用の波に乗った結果である。しかも激動期の藩内党争が深刻化するにつれて、藤太はいつか一方の勢力を代表する地位に押しあげられていた。とにかく藩主の側近にせまるほどの、平時には彼の身分でたどりつけるはずもない頂上の座とはいえたが、いつも不安定に揺らいでいる。必死に持ちこたえようとする藤太を奈落に突きおとす、それは思わぬ陥穽^{かんせい}であつたりもした。――

嘉永六年六月三日、西暦でいうと一八五三年七月八日、相模湾の濃い朝靄の中から、異様な形の巨船が四隻、黒煙を吐きながら突如として出現したころ、藤太はすでにその頂上の座に爪をかけている。

——ペリー来航。

徳川幕府による鎖国政策の一角が崩れる瞬間。あらゆるものが、さまざまな方向に加速される契機となった大事件である。

長州藩の改革要員として、ようやく維新史の稜線に姿をあらわしたばかりの棕梨藤太にとっても、それは徳隣寺墓地の一隅に埋没するに至る彼自身の天路歷程が、始まるときであった。

第一章 風の旅情

棕梨藤太が、旅装を整えて、ひとり江戸桜田の長州藩邸を出たのは、嘉永六年九月十五日の午過ぎだった。黒船騒ぎがあつてから、およそ三カ月の後である。

たけなわとなつた酒宴のざわめきが、門のあたりまでも伝わってくる。思わずそれに聴き耳をたてていると、中川宇右衛門が、無腰のまま、急ぎ足で追いかけてきた。見送りは彼だけで、しかもあたりを憚るようなおどおどした気配が感じられる。

藩主の不興を買つて役を罷免された直後から、藤太に接近することを、皆が避けているのだ。宴席を中座して送りに出た宇右衛門は、まだ義理を弁えているといわなくてはなるまい。幼少のころからの友人で、藤太とは同い齡の四十九歳だが、宇右衛門のほうがはるかに老けて見える。用所役をつとめていた。子供のころ「雄鷄おんどろ」などと仇名されたその細い目をしばたたいている萎んだ顔に、藤太は別れの微笑をむけた。酒臭い息を吐きかけな

がら、宇右衛門がいう。

「ご帰国の上は、ずいぶんと身体をいとわれよ。坪井様にもよろしゅうにな」

藩主をはじめ当役座の者は、江戸暮らしの年数を重ねるうちに、多少は意識的に、言葉から長州訛りを消している。頑固に方言を使っているのは、藤太くらいものだ。

「周布政之助^{すふまさのすけ}らに負けちゃいけん^{すけ}でよ、宇右衛門」

声をひそめて、やはりそのことをいった。

「承知しておるわ」

答える宇右衛門の声も低いが、何となく心もとない。そそくさと、彼は、邸内へ引き返して行った。

江戸方は、当分周布派に牛耳られるな、と宇右衛門の後姿を、目で追いながら藤太は思った。藤太が罷免されたあとの右筆^{ゆうひつ}には、添役の周布政之助が引きあげられ、新しく赤川喜兵衛が添役に就いた。赤川は、藤太と同じく坪井九右衛門につながる人物だが、政之助ほどの力はない。

「負けちゃいけん、か」

こんどはそれを自分に呟いて、藤太は歩きだす。江戸の風は、なま暖い肌ざわりを覚えさせた。

識らぬうちに急ぎ足になっていることに気づき、慌てて歩をゆるめた。まるで目的のない旅に似ている。萩への道のりは、遠いほどよいではないかと、彼は自嘲のにじむかすかな苦笑を泛べた。

黒船警備の大森海岸出兵に対する恩賞問題で、藩主と激論したときの藤太は、もうここにはいないのだ。人が変ったみたいに温厚な武士にかえった彼が歩いている。藤太は、長身である。がっしりした肩が、歩くたびに揺れすぎるくらい大きく左右に傾く。一步一步を踏みしめながら、少し肥満のきざしをみせた体を運んでいると、この三カ月のめまぐるしい身辺の動きが、緩慢に繰り出されるように思い起こされた。

あの日、棕梨藤太は、江戸桜田の長州藩上屋敷にいた。藩主毛利敬親の出府に随従した江戸方右筆としてである。

四ツ刻（午前十時）、幕府から黒船警備のため大森海岸に出動できる準備を整えるようにとの命令が届く。藩邸内では、慌しい人の出入りが終日つづき、翌日はさらに喧騒をきわめた。六百人の藩兵を揃えるというのだ。

「棕梨、棕梨はおらぬか」

当役の浦鞠負が、甲高い声をあげながら、摺り足に廊下を走ってくる。

「ご家老、棕梨はこれにおります」

書庫で調べものをしていた藤太は、文書を手にしたまま、扉の外に半分だけ大柄な体を乗り出して答えた。

「何じゃ、そこか」浦は相手の落ちつき払った様子が不満らしく、手の甲で汗を拭い「出陣の条書を作らねばならんぞ、よいのか」と、いくらか怒気をふくませていった。

「そのことなら、間もなくでござります」

藤太は、古びた軍令集を押し戴くしぐさで、浦に笑いかけた。いわれるまでもなく、先程からカビ臭い書庫を掻きまわしているのだ。

「ならばよろしい」

「ところでご家老、藩兵の数はいかがでござります。集まりましたか」

「萩藩だけでは、足らぬ。支藩にもよびかけ、足輕、中間まで入れて四百人、ほかに江戸遊学中の者を狩り集めても、六百人はとても無理じゃな」

浦は、愚痴るようにいい、また忙しく廊下の奥に消えて行つた。

それでも取りかかりが早く、備えもあったので、三日後の六月七日夜、あらためて幕府からの出動命令が届いたとき、藩邸内には軍装の藩兵がすでに待機していた。結局、五百五十二人である。

「毛利殿のお手並、恐れ入りました。このことはご老中にもしかと伝えおきましょう」

幕吏は、満足気にいいのこし帰って行った。

無論、これまでにないことだが、右筆である藤太は、出陣のための条書を作成しなければならぬ。藩邸には、毛利元就らしいの軍令集一切が揃えてある。出陣のさいの儀式や戦場において兵士が守るべき条々を詳細に規定した記録文書の写しである。もはや時代にそぐわない事項もあるが、結構今に通用する心得が多いのに藤太は感心しながら、大急ぎで整理してみる。

戦乱にあけくれたころの人間の知恵が、歳月の埃にまみれながら、なお息づいているのだ。農作物を踏み荒らすなどといった条項が目立つ。このさいは相手が黒船だから、どのような戦争になるのか見当もつかないが、適宜選り分けた上で、藤太は本書と副書とから成る条書を手早くつくりあげた。

藤太が差し出したそれを当役（江戸家老）の浦鞠負が、うやうやしく藩主に示す。敬親は、ざっと目を通しただけで、浦に返した。

「この条書、棕梨がまとめたものでござりますが、よく出来ております」

藤太を賞揚するその言葉が聴こえなかったのか、敬親は、まったく別のことを浦に話しかける。かすかに傷ついた気分で藤太はそんな藩主を見た。

「どうじゃ、幕閣も、これで毛利を見なおすであろうな」

と、いつになく上機嫌だ。

「ほかの大名は、こうも行かなかったそうにござります。火事装束しか揃わぬ藩ばかりだと聞き及びます」

「そうであらう」

「天保以来の改革が、まずは江戸で結実したと申せましょう」

浦が、しきりに藩主の氣持を擦るくすくすようなことをいつている。

黒船来るの報に驚愕した幕府は、各藩に江戸湾沿岸の警備を命じたが、出動のさいの装備は、火事装束でよいというのであった。うちつづいた太平に狎なれ、甲冑などの準備が整っていない事情を知っているので、武家のぶざまな恰好を庶民に見せまいとする配慮なのである。

長州藩では、米艦来航と聞いた直後から武庫を開いて甲冑を用意し、しかも三門の火炮と百丁の和銃で武装した五百人余の藩兵を五日間で編成しおわたったのだ。

藩邸に武庫を持たない藩も多かった。大名の謀叛を恐れていた幕府としては、むしろ喜ばしいことだったにちがいない。だが、火事装束などという出動の指示を与えなければならぬこのような事態を迎えて、今さら長州藩を頼もしくも思いはじめている。